

## 保育をめぐる、保育がめぐる(2)

### —3施設がともにある環境をいかして—

○灰谷知子 佐々木麻美(お茶の水女子大学附属幼稚園)

中澤智子 森藤郁子(お茶の水女子大学附属いずみナーサリー)

樋口陽子(文京区立お茶の水女子大学こども園)

#### I. はじめに

お茶の水女子大学では、平成28年度から4年間の計画で、附属学校と連携した総合的な教育組織の強化を中期目標として掲げている。「同一のキャンパス内に設置されている大学と附属学校等が密接に連携し、伝統ある教育・研究資産を活用して、生涯にわたる学びを見通した総合的な教育理念と教育・研究組織を構築する」とし、平成28年度から同一キャンパス内にある、いずみナーサリー(3歳未満児の学内保育施設、以下ナーサリー)、こども園(文京区立)、附属幼稚園の三乳幼児施設で三園合同研究会を立ち上げ、相互に公開保育や研修等に参加することで、交流・連携を深めてきた。

#### II. 研究の経緯と目的

三園の交流は、幼稚園園庭の「お山」や学内の広場、中庭などで出会ったり、季節の行事の折にお互いの園を訪れたり、畑の収穫物を届け合うなどして、自然な形で続けてきた。昨年度はそれに加えて、それぞれの園の保育者がお互いの保育に観察・参加する機会をもち、保育後の語り合いや、メールでのやりとり等で保育を振り返るということを重ねてきた。

昨年度の三園合同研究会では、「日常性の共有」「語り合い」が保育をめぐる思いを共有することにつながり、さらには相互に支え合い、学びを深め合う関係を育むことにつながるということを改めて実感することができた。

(※2019年度のポスター発表を参照)

このような経緯を踏まえ、今年度は、保護者とのやりとりが対話的になっていくためにはどのような工夫ができるのか、子ども理解へどうつながるのか等について検討することにした。

#### III. 研究の方法

研究の具体的な進め方としては、各園が作成している週案やポートフォリオ、保護者向けの掲示物を持ち寄り、それらをきっかけにして、迷っていることや悩んでいることを含めて思い思いに語り合い、聞き合った。こうした三園合同研究会の後は、各自感じたことを心に持ちながら日々の保育にのぞみ、ふと湧き上がってきた思いを、メールでやりとりしたり、次に集まった時に話題にあげたりして、共有するようになった。

#### III. 三園合同研究会(語り合い)を経て考えたこと【幼稚園発】

附属幼稚園では平成30年度より文部科学省の研究開発学校の指定を受け、「幼児の発達と学びの連続性を踏まえた幼稚園の教育課程(3歳児～5歳児)の編成及び保育の実際とその評価の在り方について」というテーマで研究に取り組んでいる。研究の一環として本園の教育課程を見直すにあたり、週案の書き方の工夫を試みている。前週の子どもの姿から保育を振り返る際に、文章記録だけでなく写真と短い説明をつけることにした。また、この写真記録部分は、掲示して保護者とも共有できるようにした。保護者と共有できることを増やすことは幼稚園としての課題であったので、すぐに取り組んでみたものの、その書き方には試行錯誤していた。三園の話し合いで「どのような週案を作成しているか」「保育の振り返りをどのように記録しているのか」「保護者とどのようにして子どもの育ちを共有しているのか」などを聞いたり、迷いや悩みを率直に語ったりするうちに以下のようなことを考えるようになった。

##### <写真を見ながら語り合う>

保育の中のある一瞬を切り取る写真。他園での実践を聞くと、写真を撮ったり写真を選んだりすることは、保育者自身が子どもの今の姿や遊びの意味について深く考え直す時間になっているのだと改めて感じた。また写真を使用して週案を作るという共同作業の中、保育者同士で子どもたちの今の姿を語り合う時間こそが、子ども理解を深める上で重要なのだと改めて気付くことができた。

##### <日々の子どもの姿の共有>

写真を選び、そこに言葉を添える際に、どう伝えようかということをもまず最初に考えていた。しかし他園での保育者と保護者とのやりとりを聞いていると、受けとめ方は保護者によって様々であり、余白があるような伝え方をしていくことで保護者との対話が生まれていくことに気付かされた。また日々の子どもの姿を共有し、時間が経過するうちに、保護者に自然と伝わっていくものがあるということも、手応えとして感じている。今の子ども達との暮らしを保育者と保護者とが共に味わうことを、今後とも大事にしていきたい。

### 【ナーサリー発】

2年前の3月、こども園のポートフォリオを見る機会があった。見やすく、読みやすく、保護者とのやりとりもできる形式だったことに刺激を受け、今年度から取り入れてきた。

今年度ナーサリーに入った0歳児担任保育者は、年度当初に定めた形式でポートフォリオを作成していたが、「ナーサリーから」というスペースも写真につけていたコメントも「言葉はいらないな」と思うようになり、徐々によりシンプルな形式になっていった。(実物は当日掲示)

一緒に作っているスタッフたちと話し合ったり、保護者から返ってきたポートフォリオの感想を読んだりするうちに、ごくごく自然にそのような流れになっていったのだが、なぜそうなっていったのかについては、あまり考えていなかった。三園での今回の研究で、改めて問い直すこととなった。

三園の語り合いの中で「写真で伝わることで、受け止め方、考え方は様々だということを考えると、では自分はそのことをどうとらえているのか、ということを考えざるを得ない・・・」という感想を聞いた時に、ようやく腑に落ちたような気がした。そうなのだ。相手が受け取る思いを大事にしようとしたら、私たちが全てを伝えたいと思うのは傲慢すぎる。それならば一つか二つ、一番大事に思っていることのみで十分なのではないか。だからそれだけを伝えるために、言葉を削り、伝えたい思いだけを明確にしていくことが大事なのだろう。

三園の語り合いの中で、漠然としていた自分の思いが言葉となって諒解することができ、ポートフォリオ作りにもさらに楽しく取り組めるようになったと感じている。

### 【こども園発】

こども園の0歳児～2歳児クラスでは、毎月それぞれの子どもたちの様子や育ちを保護者にポートフォリオを用いて伝え、さらにクラスの様子を1週間に1度ドキュメンテーションを用いて伝えるなど、様々な方法で子どもの育ちを保護者と共有している。

こども園では、ポートフォリオについて第72回日本保育学会大会で「ポートフォリオを使って子どもの育ちを共有する」というテーマでポスター発表した。大切にしている点を次にまとめる。

- ①月に一度作成しているが、旬な話題を旬なうちにと考え、その子どものタイミングで作成し渡している。
- ②ポートフォリオを作成することで一人ひとりの育ちを振り返り、ポートフォリオを成長記録として活用する。
- ③保護者との応答的なやりとりを重視する。

このようにポートフォリオについて検討を重ね実践してきたが、今回三園合同の語り合いの場に参加し、各園の実践を聞くことで自分の実践を見直す機会となった。ポートフォリオやドキュメンテーションを活用して保護者とやりとりしてきたが、果たして、私たちが本当に伝えたいと思っていることが保護者に伝わっているのだろうか、と問い直す機会を得たのである。

その中で得た気付きから以下のような新しい可能性や課題を見出した。

#### <あなたかさと共にメッセージが伝わってくる>

いずみナーサリーのポートフォリオは、こども園が作成しているものとは大きく違っていた。写真は2～3枚という点は同じだったが、職員からのコメントはごく少なく、そこにその子をイメージした小さなイラストがついていた。伝えたいことが濃縮された短いメッセージは、読み手にもしっかりと伝わってくるように思われ、イラストからは温かみを感じられた。

言葉は量ではなく質なのではないか、わかりやすくと思って書いた文章はそれほど相手に伝わっていないのではないか、そして、短いメッセージで伝えるには、やはり日々の保護者とのやり取り(応答的なかわり)が大切なのではないかと感じている。

#### <ポートフォリオを用いた月間指導計画作成>

ポートフォリオを、保護者と共有するためだけではなく、保育者間でも活かせるように、いずみナーサリーの実践を参考に、ポートフォリオを用いた月間個別指導計画(個別経過記録)の作成を試行している。それぞれやりやすい方法で可能性を探っている段階である。さらに園内で検討していきたい。

## IV. まとめ

ポートフォリオや掲示に載せる写真や添えた言葉には保育者の思いが込められている。しかしそれを見る保護者の感じ方は人により様々であろう。保護者が思いをめぐらせながら見る余白があることが大事だと思う。保育者と保護者とが互いに思いや願いをもってやりとりを重ねていくと、子ども自身の思いや本当に願っていることなどに気付くことができるのではないかと、これが対話的なやりとりなのだろうと考える。

また、対話的なやりとりを意識すると、保育者は自分が何を伝えたいのかということに、より深く向き合うことになる。保育者が自分自身と子どもとのかわりを内省し、保育者同士で語り合うことが、子どもを捉える眼差しや今保育の中で大切にしていることについて、見つめなおすことにつながった。

3施設が同一のキャンパス内に設置されているとは言え、語り合いの時間をゆっくりもつことは難しい。三園合同研究会をきっかけにして語り合ったことは、私たち保育者の思いを感じ合うと共に、対話の相手である保護者への思いをめぐらせる時間でもあった。子ども、保護者、保育者として思いをめぐらせながら今後も三園での研究を続けていきたい。